東日本大震災時における新聞報道分析

ージェンダーの観点から見る災害報道ー

青木真衣（早稲田大学学部生）

1. はじめに

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に発生した東日本大震災では大きな被害をもたらし，人々は経験したことのない大規模な災害に直面した．交通が遮断され，多くの人々が家族などへの連絡を試みるために通信回線が混み合い，平時においては困難なく使用することができる電話さえも使用不可能となった．このような大規模な災害が発生した場合において，被災地の人々はメディアが発信する情報を頼りに命を守るための行動を選択し，被災地以外の地域で生活をする人々にとっては現地の様子を知ることができる唯一の手段がメディアとなる．そのため，人々は被災地で生活をしているか否かに関わらず，唯一の情報源であるメディアからの情報は透明で，正しいものであると信じて受け取ってしまう(cf. 坪井, 2013)．しかしながら，災害報道が伝えるものは必ずしもありのままの現実でとは限らない．人々が疑うこともできずに受け入れていた東日本大震災時の報道の中にも，情報と実際の被災地の状況や人々の行動，生活との間に齟齬が生じていた可能性がある．本研究では，東日本大震災時の新聞記事からどのような思想が読み取れるのかを CDA(Fairclough, 2018)の手法を用いて分析することを通して，ジェンダーの観点から東日本大震災時の新聞報道を捉え直す．また，その結果として，東日本大震災時に取材対象となった人々の属性と取り上げられた声にはジェンダーバランスの不均衡があったこと，ならびに，当時の新聞記事が伝える情報の中にはジェンダーステレオタイプを反映するものが含まれていたことを指摘したい．

2. 先行研究

2.1 東日本大震災に関する報道の分析

東日本大震災においても，当時の報道についての分析をする研究が行われてきた．新聞報道においては，全国紙と地方新聞の分析をした研究(渡辺，2011)や New York Times の記事から東日本大震災報道について分析をした研究(五島，2012) などがある．加えて，東日本大震災のみにとどまらず，これまで阪神淡路大震災に関する災害報道の分析(山中，2018)や熊本地震に関する災害報道に関する分析(鈴木，2017)がされてきた．また，福島における原発事故に関する報道を分析した研究(佐藤，2020；名嶋ほか編，2015)も見られる．

2.2 ジェンダー学における研究

ジェンダー学の分野においても，東日本大震災時に顕在化したジェンダー問題について研究が蓄積されてきた．村田(2012)は，災害時において避難所の運営や支援物資の供給が男性リーダーによってなされることで様々な場面において女性が疎外されてしまうことや，性別役割分業から無償で炊き出しなどをすることが役割として与えられてしまうことを挙げる．その上で，女性は非常時に異を唱えることが困難であるがゆえに二重の苦しみに苛まれてしまうと指摘する(村田，2012)．また，竹信(2012)は，意思決定の場にいる女性やリーダ層の女性がほとんど存在しなかったために支援物資の不均衡が生じたことや，起きていることを「解決すべき課題」としていく力が働かなかった現状を指摘する．それを踏まえ，災害時において暴力によって安心感を封じられ，自己主張をすることができない女性を解放することの重要さを指摘する(竹信，2012)．

2.3 先行研究を踏まえて

これまで，災害報道を分析した研究では，海外における報じられ方(五島，2012)や全国紙と地方新聞(渡辺，2011)または東西における報道の温度差(山中，2018)などに着目して研究がされてきた．他方，ジェンダー学における研究では，女性が現実として何に苦しんでいたのかに焦点を当て，ありのままの現実を伝える試みがなされてきた．その上で，今後どのように女性に対する支援体制を構築していくかについて検討が加えられてきた．

しかしながら，東日本大震災時の報道内容についてはジェンダーバランスとの関係では分析されてこなかった．ジェンダー学での研究において指摘されてきた女性の声が届きにくいという現状が，報道においても同様のことが言えるのかは明確ではない．また，新聞報道において男性と女性がどのような形で描写されてきたのかについても分析が必要である．以上を踏まえて，本研究においては東日本大震災時の新聞報道をジェンダーの観点から分析をすることを試みる．

3. 研究方法

3.1 方法

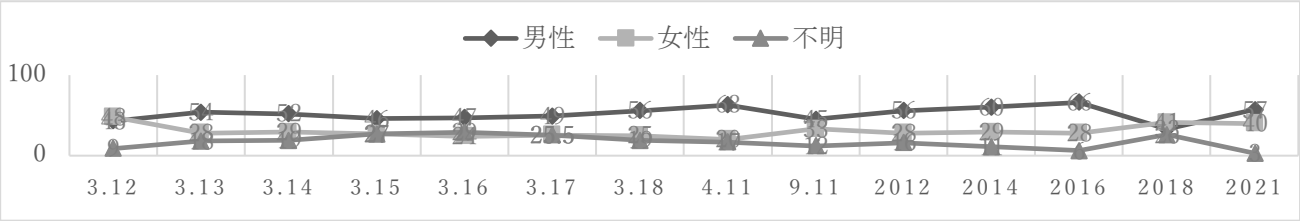
本研究においては，CDA(Fairclough, 2018)の手法を用いて新聞記事を分析するとともに，「詩的機能」や「指標性」など社会言語学ならびに言語人類学における理論や先行研究をもとに新聞記事の内容について分析を加える．「詩的機能」(Jakobson, 1960)とは，同一ないし類似した要素が反復して生起することによるメッセージの全景化をいい(小山，2018)，ここでいう要素とは，同一の言語形式，意味，音，リズムを指す(武黒，2018)．また，「指標性」とは，記号表現と指示物との間に時間・空間・因果的連続性があることをいう(山口，2018)．

3.2 データ説明

本研究においては，朝日新聞，読売新聞，毎日新聞から無作為に330記事を選択してデータの分析を行った．2011年3月12日から3月18日までの1週間については，朝刊と夕刊それぞれ5つの記事を選択し，1日あたり計30記事を分析の対象とした．その後，震災から1ヶ月が経過した2011年4月11日と半年が経過した2011年9月11日については朝刊と夕刊の区別をすることなく各社5つの記事を選択した．震災から1年が経過した後については，データが膨大であるため便宜上，2012年，2014年，2016年，2018年の3月11日と2年おきに各社朝刊と夕刊それぞれ3つの記事を選択した．また，震災から10年が経過した2021年3月11日の記事について分析をするため，2020年の記事を選択することなく2012年から2018年と同様に2021年についても朝刊と夕刊それぞれ3つの記事を選択した．

4. 取り上げられた「声」(Bakhtin, 1981)に関する分析

分析にあたってまず，東日本大震災後の計330記事での取材対象者となった人々の属性と取り上げられた声が誰のものであったかを確認した．取材対象者については男性が52%，女性が29%であり，声に関しては男性が52%，女性は全体の31%にとどまることがわかった．この結果は、災害時に女性の声が届きにくかったという指摘(竹信，2012)や，女性の声が届くような組織の構築には未だ至っていないという現状に対する指摘(竹信，2012)と合致するものであった．



【図1】性別ごとの取材対象者数の推移

【図2】性別ごとの取り上げられた声の数の推移

5. 震災直後(2011年3月12日から3月18日)の新聞報道分析

5.1 成人の描写に関する分析

以下の記事のように，成人では「懸命に捜索する男性」と「家庭的な/ケアの提供者としての女性」の対比が見られ，災害時においても「勇敢な男性」と「家庭的/支援を厭わない女性」といった性別役割分業的な思想が強く反映されている記事が多くを占めた．

「○○(男性名)さんはその後，自宅があった海沿いの同市気仙町を中心に，妻○○さん(48)がいないか避難所を捜し回った．」
(「お母さんどこ？　ひとりぼっちの避難所　中３少年「僕はここ」」，2011 年３月 17 日，読売新聞，東京朝刊，社会，31 頁)

「第一原発がある同県(＝福島県)大熊町に住む主婦(39)は，１歳の次男を抱きかかえ，５歳の長男の手を引いて川俣町の避難所にやってきた．」
(「何が起きているのか　安全、何キロ離れたら　福島原発で爆発，避難指示　東日本大震災」2011 年３月 13 日,朝日新聞，朝刊，３社会，17 頁，括弧内引用者)

また，成人では女性が捜索をする姿を報じる記事もあったが，男性とともに捜索をする姿が報じられていた．

「陸前高田市矢作町の林業，○○(男性名)さん(46)と妻○○さん(43)は 12 日午後 4 時半ごろ，大船渡駅近くの会社に勤める長女○○さん(18)の行方を捜しに来た．」
(「東日本大震災：駅の痕跡もなく――岩手・大船渡」，2011 年３月 13 日，毎日新聞，東京朝刊，社会面，27 頁)

5.2 子供たちの描写と引用(reported speech)に関する分析

成人とは対照的に，子供たちは性別によって男子生徒と女子生徒が対比されるような描写は見られなかったが，「困難で先の見えない被災地」の状況を報じるのとは対照的に，「懸命に頑張る/明るい未来に向かう子供たち」の姿が報じられた．１つの例として，2011 年３月 17 日の朝日新聞に掲載された記事の「負けない、学びの春　県内、509 人死亡，2507 人不明　東日本大震災/福島県」という見出しが挙げられる．この見出しでは，「県内，509 人死亡，2507 人不明　東日本大震災/福島県」という被災地の厳しい現実を報じる．その一方で，「負けない」という言葉は「力強さ」や「覚悟」を指標し，「春」という言葉では「これからの明るい未来」や「リスタート」という「始まっていく春」を指標する．このように，子供たちの姿と被災地の厳しい現実を報じることで，被災地の厳しい状況の中で希望を見出して頑張る子供たちの様子から，これから先の明るい未来への期待を持たせる効果を持っていると考えられる．

また，記事においては子供たちの将来の展望が引用されていた．引用(reported speech)とは，「誰々が何々と言っていた」と伝達する行為であり，日常のコミュニケーションにおいてありふれた行為といえる(古川，2022)が，新聞記事においては，前向きな子供たちの「声」のみを報じることは，明るい未来への希望を指標していたと推測される．また，子供たちの声を紹介した記事では，成人で見られたようなジェンダーステレオタイプを示唆するような報じられ方はされず，取り上げられる声も成人では男性の方が多かったのに対して、子供たちは男子生徒と女子生徒の声が偏りなく取り上げられていた[1]．

A：「卒業式という気分ではないし，高校の合格発表は延期されたが，復興の役に立てるようにボランティアをやりたい」
B：「高校に行ってから，津波の恐ろしさをいろんな人に伝えたい」
C：「救助活動をしている消防隊員を見て，自分も人の役に立ちたいと思った．将来は消防士になろうと思う」
(「被災下の卒業，再出発の決意　教室で式，ジャージ姿も　東日本大震災」，2011 年３月 18 日，朝日新聞，夕刊，特設 A，１２頁)

5.3　小括

分析を通して，成人においては，「懸命に捜索する男性」と「家庭的な/ケアの提供者としての女性」が描写され，子供たちにおいてはジェンダーステレオタイプが反映された描写は少なく，被災地の悲惨な状況に負けずに明るい未来に向かって歩みを止めない子供たちの姿が描写されてきたことがわかる．翻ってみれば、このような人々のみが記事の中に

[1] 新聞記事においては個人名が記載されていたが，個人情報保護の観点から氏名をアルファベット表記に改めた．氏名から，A が男子生徒，B が女子生徒，C が男子生徒であると推測される．

描写され，そうでない人々は描写されにくかったことが示唆される．

6. まとめ

ジェンダーの観点からの分析によって，①取り上げられる声の数量にはジェンダーバランスの不均衡が見られること，②描写においては成人，子供それぞれに対するステレオタイプが強く反映されることで行動規範が形成されること，③行動規範が人々の行動を制限する効果を持つこと，④行動規範に反する人々の行動は描写されにくいことが指摘できる．情報の受け手である人々が望んでいる，もしくは望んでいると考えられるストーリーが繰り返し報じられることで，それがあたかも事実であるかのように人々の中に浸透していき，イデオロギーとなっていくことにも注意を向けなくてはならない．また，分析結果から，取材対象者の決定に際して取材者の恣意を排除することが困難である以上，報道機関内の多様性を担保することによってジェンダーバランスの不均衡の解消に努めることが求められる．このような立場に立つと，「東日本大震災とジェンダー」に関する研究において指摘されてきた女性の声が届かないという現状(村田他,2012)と，「メディアとジェンダー」に関する研究で指摘されてきた報道機関で働く女性が増加しているが未だ十分ではないこと(四方，2017)は関連しているように思われる．加えて，新聞での言及が作り出す規範が災害時に人々の行動を制限することによって復興の足枷になる可能性は避けなくてはならない．本研究の分析結果は，これからの災害報道において，情報の正確性はもちろん，様々な立場にある人々の声を聞き，多様性に配慮した報道が求められることを示唆している．

参考文献

Bakhtin, Mikhail M.(1981). *The Dialogic Imagination: Four Essays.* Micheal Holquist (ed.), Caryl Emerson and Micheal Holquist (trans.) Austin: The University of Texas Press.

Fairclough, Norman & Isabela Fairclough. (2018). A Procedural Approach to Ethical Critique in CDA. *Critical Discourse Studies,* 15(2),169-185.

古川敏明(2022). “He haole ‘oe?”－ハワイ語の引用と構築された対話の詩的構造化が指し示すリアリティ 片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士(編) ポエティクスの新展開－プルリモーダルな実践の詩的解釈に向けて ひつじ書房pp.101-127.

五島幸一(2012). 東日本大震災報道のレトリック分析：The New York Timesの報道から 愛知淑徳大学論集 メディアプロデュース学部篇，2，1-13.

Jakobson, Roman. (1960). Closing Statement: Linguistics and Poetics. In Thomas A. Sebeok. (ed.) *Style in Language,* Cambridge, MA:MIT Press, pp.350-377.

小山亘(2018). 社会言語学とディスコーダンスの空間 葛藤と合意の絡み合いによる現代世界の編成とプラグマティズムの原理 武黒麻紀子(編) 相互行為におけるディスコーダンス－言語人類学からみた不一致・不調和・葛藤 ひつじ書房pp.237-260.

村田晶子(2012). 被災者支援における女性センターの役割 村田晶子(編) 復興に女性たちの声を－「3・１１」とジェンダー 早稲田大学出版部.

名嶋義直・神田靖子(編)(2015). 3.11原発事故後の公共メディアの言説を考える ひつじ書房.

佐藤彰(2020). 原発事故を伝える米紙の和訳記事は「大本営発表」だったか ウォール・ストリート・ジャーナル日本版における原発事故報道の批判的談話分析 秦かおり・佐藤彰・岡本能里子(編) メディアとことば5 政治とメディア：特集 ひつじ書房pp.174-201.

四方由美(2017). 特集❷202030は可能か－「女性活躍推進法」の実効性を問う－ 日本のメディアにおける女性活躍推進 学術の動向，22(8)，74-79.

鈴木桂樹(2017). 震災とマスメディア－報道倫理をめぐって－ 熊本法学，141，227-241.

武黒麻紀子(2018). メタ語用としてのディスコーダンス 石垣島の「島と内地」の不一致を巡るコミュニケーション実践 武黒麻紀子(編) 相互行為におけるディスコーダンス－言語人類学からみた不一致・不調和・葛藤 ひつじ書房pp.161-184.

竹信三恵子(2012). 震災とジェンダー －「女性支援」という概念不在の日本社会とそれがもたらすもの ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報，15，87-98.

坪井睦子(2013). ボスニア紛争報道 メディアの表象と翻訳行為 みすず書房.

渡辺良智(2011). 新聞の東日本大震災報道 青山學院女子短期大學紀要，65，63-82.

山口征孝(2018). ゴシップに見られるディスコーダンスの分析 衝突に発展させないストラテジー 武黒麻紀子(編) 相互行為におけるディスコーダンス－言語人類学からみた不一致・不調和・葛藤 ひつじ書房pp.83-108.

山中茂樹(2018). 阪神淡路大震災と災害報道 災害復興研究，9，131-135.